

かげつか  
**影塚古墳群 2**

第2次調査  
-影塚古墳群2号墳の報告-

2016

福岡市教育委員会

かげつか

# 影塚古墳群2

第2次調査  
－影塚古墳群2号墳の報告－



調査番号 KZK-2  
調査番号 1444

2016

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘を隔てて中国大陸と海路でつながる福岡市は古くから朝鮮半島、中国大陆との交易、文化交流の窓口として独自の発展を遂げてきました。この長年にわたる交流により、市域には数多くの遺跡が残されており、これらを永久的に保存し、未来の子孫たちに残していくことは現在に生きる私たちの義務でもあります。

しかしながら、現代の諸再生産活動によってこれらが失われつつあるのが実情であります。福岡市教育委員会では、これらの開発によってやむを得ず失われている埋蔵文化財について事前の発掘調査を行い、写真類・図面などの記録による保存に努めているところであります。

本書は、宅地造成事業に伴って実施した福岡市早良区影塚古墳群の第2次発掘調査（2号墳）について報告するものです。影塚古墳群は、横穴式石室を有する古墳時代後期の円墳であり、北側に存在していた1号墳とともに、ながらく地元の信仰の対象となっていた古墳です。今回の調査では、古墳の時期や構築方法など新たな知見を得ることができました。つきましては、この成果が市域の文化財保護への理解の一助となり、また学術研究資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書作成に至るまで多大なご協力を賜りました、株式会社トレップ様をはじめとする関係者の皆様には心から感謝いたします。また、調査期間中にご迷惑をおかけしました地元の皆様をはじめ、多くの方々のおかげで発掘調査を行うことができました。お礼申し上げるとともに、本書が広く活用されることを願います。

平成28年3月25日

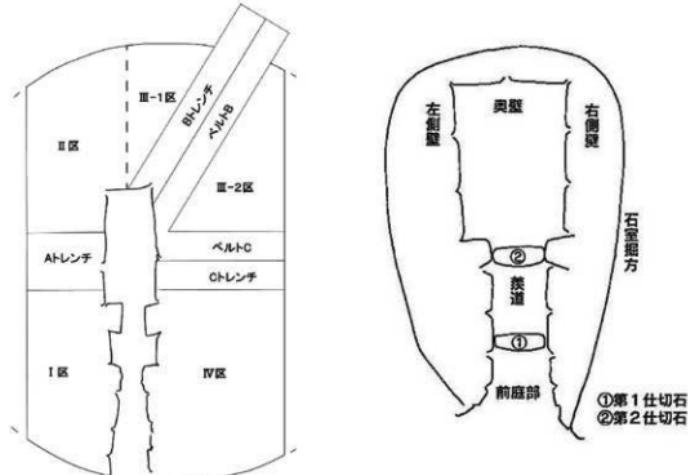
福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

## 例言

- 1 本書は宅地造成事業に伴って行った、早良区野芥地内における影塚古墳群の発掘調査の報告書である。
- 2 影塚古墳群は、これまで宅地造成に伴い1号墳の調査が実施されており、今回の調査は第2次調査（2号墳）である。
- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は、調査担当者の大森真衣子、服部瑞輝のほか池田祐司、名取さつき、坂口剛毅がおこなった。
- 4 本書に掲載した公共座標は世界測地系によるものである。
- 5 本書で用いた方位は座標北である。
- 6 本書に掲載した遺物実測図の作成は、服部のほか米倉法子・井上加代子がおこなった。
- 7 本書に掲載した遺構・遺物写真撮影は、大森・服部がおこなった。
- 8 本書に掲載した図の製図は、大森・服部・井上がおこなった。
- 9 本書の執筆は大森・服部がおこなった。
- 10 遺物番号は通し番号とする。なお、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 11 本書に関する記録類及び出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- 12 本書で使用する墳丘に設定したトレンチの名称とそれに区画される墳丘各区の番号、古墳および石室各部位等の呼称は、下図に示した通りである。
- 13 本書の編集は大森・服部がおこなった。

遺跡調査番号	1444	遺跡番号	KZK-2
所 在 地	福岡市早良区野芥五丁目84番3	分布地図番号	075西油山
開 発 面 積	710m <sup>2</sup>	調 査 面 積	190m <sup>2</sup>
調 査 期 間	平成27年2月2日～平成27年3月19日	事前審査番号	26-2-315



## 本文目次

I.	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の立地と周辺の歴史的環境	
1.	遺跡の立地	2
2.	歴史的環境	2
III.	調査の記録	
1.	調査の概要	4
2.	古墳の位置と現況	4
3.	墳丘	6
(1)	地山整形	6
(2)	盛土	6
(3)	墳丘祭祀	10
4.	埋葬施設	12
(1)	玄室	13
(2)	前室	13
(3)	羨道部・閉塞施設	13
(4)	前庭部・墓道	14
5.	出土遺物	14
	墳丘出土遺物	14
IV.	まとめ	15

## 挿図目次

図1	油山周辺の群集墳 (S=1/100000)	2
図2	影塚古墳周辺遺跡分布図 (S=1/6000)	3
図3	調査区位置図 (S=1/1000)	4
図4	現況測量図 (S=1/300)	5
図5	墳丘遺存図 (S=1/150)	5
図6	Cトレンチ土層断面 (S=1/40)	7
図7	Bトレンチ土層断面 (S=21/60)	8
図8	a-a' 土層断面 (S=1/40)	9
図9	墳丘土器出土状況 (S=1/3, 1/10, S=1/100)	10
図10	影塚2号墳石室実測図 (S=1/80)	11
図11	石室内出土遺物 (S=1/4)	12
図12	前庭部～墓道平面図 (S=1/60)	13
図13	墳丘出土遺物実測図 (S=1/3)	15

## 図版目次

Ph 1. 現況（東から）	16
Ph 2. 現況（北から）	16
Ph 3. 現況（西から）	17
Ph 4. 墳丘遺存遠景（南から）	17
Ph 5. B トレンチ土層断面	18
Ph 6. C トレンチ土層断面	18
Ph 7. a-a' 西側土層断面（北から）	19
Ph 8. a-a' 東側土層断面（北から）	19
Ph 9. 前室敷石検出状況（石室入口から）	20
Ph10. 奥壁	20
Ph11. I 区墳丘上遺物出土状況（西から）	21
Ph12. IV区墳丘上遺物出土状況（南から）	21
Ph13. 墳丘・石室内出土遺物	22

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課は、福岡市早良区野芥五丁目84番3における宅地造成に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成26年7月10日付で受理した（事前審査番号26-2-315）。これを受け、同課は対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である影塚古墳群に含まれていることから、同年7月11日に踏査を実施した。その結果、遺跡の存在が確認されたことから、遺跡の保全等に関する照会者との協議を重ねたが、埋蔵文化財への影響は回避できないことから、土地造成部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成27年1月30日付で、株式会社トレップを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成27年2月2日から同年3月19日に発掘調査を、平成27年度に資料整理・報告書作成をおこなうことになった。

## 2. 調査の組織

調査委託	株式会社 トレップ	
調査主体	福岡市教育委員会	
調査統括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課長 同課調査第2係長	常松幹雄 榎本義嗣
調査庶務	埋蔵文化財審査課	横田 忍
事前審査	埋蔵文化財審査課	比嘉えりか（平成26年度） 大森真衣子（平成27年度）
調査担当	埋蔵文化財調査課	服部瑞輝 大森真衣子（平成26年度）
調査作業員	辻節子 三谷朗子 梅野眞澄 松本順子 小田義之 吉野一憲 宮原豊 稻富聰 長安慧 宮本勇作	
整理作業員	鈴木諒子 中村祐子	

## II. 遺跡の立地と周辺の歴史的環境

### 1. 遺跡の立地

早良平野は脊振山地から延びる山塊、丘陵を隔て東の福岡平野と西の糸島平野の間に位置する。平野には室見川をはじめとする大小の河川が流れ、これらの河川の沖積作用によって形成されている。この平野の東縁中央部、脊振山系に属する油山から派生する標高27~32mの油山西麓は、無数の小さな谷があり複雑な地形を形成している。その先端部には、谷川の浸食によって削り残された独立丘が点在しており、その一つに影塚古墳群は造られている。2基の円墳から構成される当古墳群のうち、北側の1号墳は昭和46年の発掘調査後に消滅し、南側の2号墳のみ残存していた。

### 2. 歴史的環境

影塚古墳群の位置する油山より延びる丘陵一帯では、多くの群集墳が営まれたことで知られている。油山西麓に広がる古墳群は、現在の福岡大学のグラウンドとなった七隈古墳群の丘陵を境に、東西に分けられる。西側の古墳群は概ね早良平野に面し、東側の古墳群は樋井川流域に位置している。これは後の比伊郷、野芥郷の境とも一致するとみなされる。

野芥郷に位置する油山西麓には、三郎丸古墳群、重留古墳群、クエゾノ古墳群、山崎古墳群、西油山古墳群、霧ヶ滝古墳群、影塚古墳群、駄ケ原古墳群、大谷古墳群等があり、東麓には倉瀬戸、早苗田古墳群、鳥越古墳群、瀬戸口古墳群、東油山古墳群、桧原古墳群、太平寺古墳群、柏原古墳群等の古墳群が存在する。また、北方へ細長く延びる飯倉丘陵上には、飯倉古墳群、千隈古墳群がある。これら古墳群は、いずれも古墳時代後期、特に山麓部に爆発的に築造され、数・密集度とも高い。しかし、クエゾノ古墳群や梅林古墳のような丘陵部に位置する古墳は点在傾向にあり、その築造時期も、古墳時代中期ごろに営まれた古墳群がみられる。これらから丘陵部から山麓への墓域の移動という説明が可能であるように思われるが、丘陵部に位置する古墳の中には古墳時代後期に築造されたものも見られ、一概に墓域が移動したという論理だけでは不十分で、現在でも議論が行われている。

また、油山西麓の古墳群は古くは江戸時代に編まれた貝原益軒の『筑前国風土記』に「野芥村には石窟廿五ヶ所あり、国俗鬼塚と云。穴の入り口はせばく、奥は広し…」「西油山には鬼塚と石窟廿許あり。」等、記述が多くみら廣く知れ渡っていたものと考えられる。また一部は開口していたと思われ、盗掘・石材採取などにより原形をとどめていないものも見られるほか、石室内に祠を安置し信仰の対象となっていた古墳もある。影塚古墳群もその一つで、1・2号墳とともに墓域以外の利用のされ方をしていた経緯があり、地域の歴史を語るうえでは重要な位置づけにあるといえよう。



図1 油山周辺の群集墳(S=1/100,000)

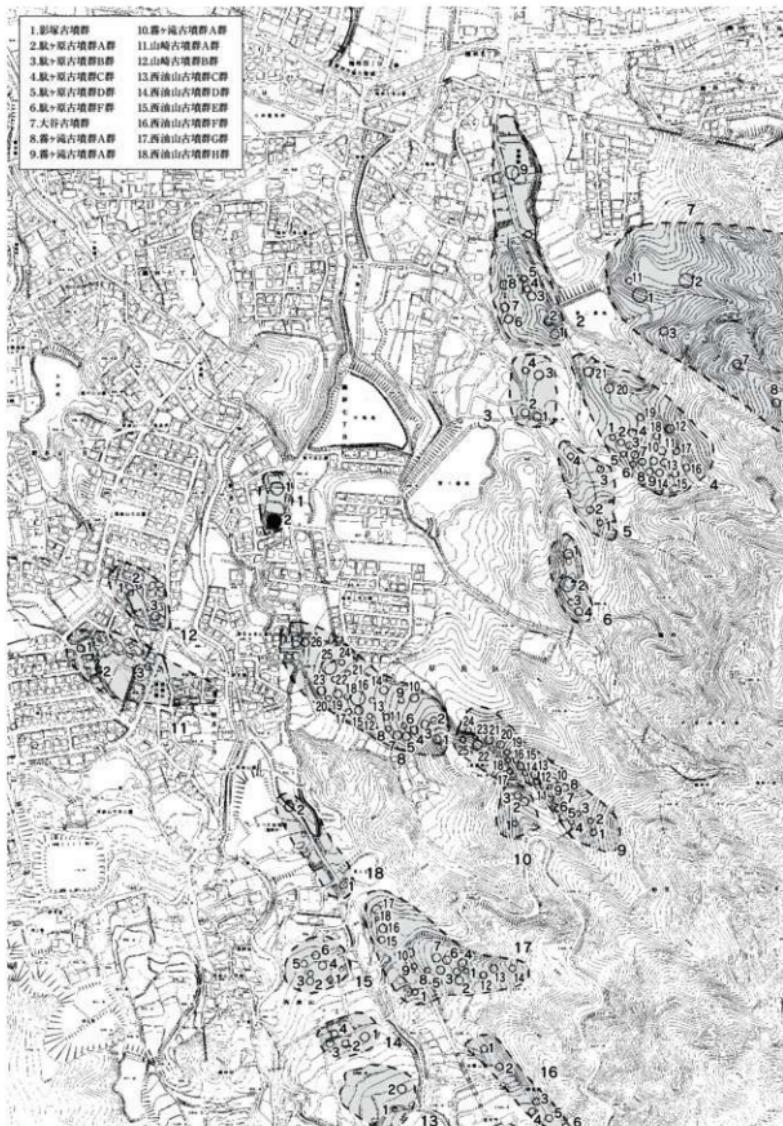


図2 影塚古墳周辺跡分布図(S=1/6000)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

影塚古墳群2号墳の調査は、平成27年2月2日の現況測量をもって開始した。同4日には高所作業車による現況写真を撮影し、同5日から作業員を投入しての人力掘削を行った。後述するが墳丘の南北は後世の造成の影響で急峻な崖になっていたため、石室側壁は非常に不安定な状態であった。特に北側(左壁)は玄室左側壁の石材が抜け落ち石室崩壊の危険性があった。そのため、古墳墳丘部・前部の調査を中心に行い、石室内部に関しては、閉塞施設と前室を一部調査するにとどまった。近世以降、古墳自体が信仰の対象となっていたこともあり、大半は攢乱を受け当時の生活面は遺存してはいなかったため、主に墳丘部の調査をおこなった。平成27年3月4日には、墳丘遺存面の写真撮影を行い、3月19日にはすべての作業を終え撤収した。今回調査することができなかった玄室内は、造成工事の際、床面を中心に立会調査をおこなう予定である。

#### 2. 古墳の位置と現況

影塚古墳群2号墳の位置する油山西麓は、無数の小さな谷があり複雑な地形を形成している。先端部には、谷川の浸食によって削り残された独立丘が点在しており、その一つに影塚古墳群は造られている。標高47~52mを測る。昭和46年の1次調査着手当初は、大きな前方後円墳の可能性が指摘されていたが、地形測量により円墳2基の古墳群であることが明らかとなり、北を影塚1号墳、南の古墳を影塚2号墳と呼ぶようになった。北側の影塚1号墳は、調査後宅地化しているため現在は南に位置する2号墳のみ残丘状に遺存していた。2号墳は墳丘北側・南側が既に大きく削平されており、比高差約10mの崖となって



図3 調査区位置図(S=1/1000)

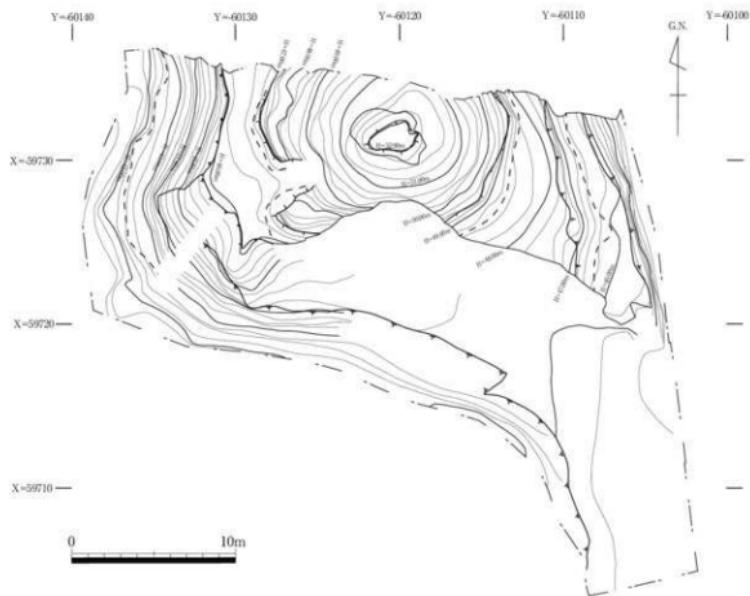


図4 現況測量図(S=1/300)

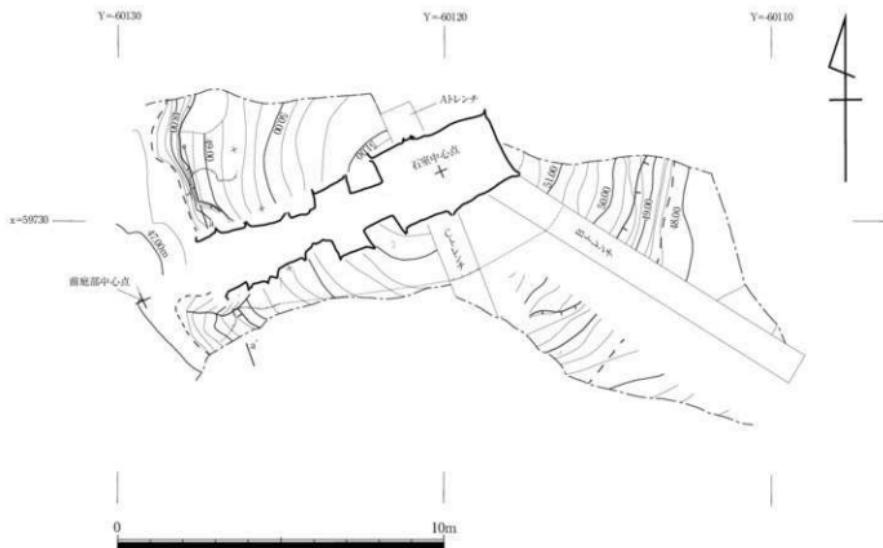


図5 墳丘遺存図(S=1/150)  
- 5 -

いる。そのため残存する墳丘裾の平面形は原型をとどめておらず、本調査において正確な古墳の全形を把握することは困難であった(図4)。しかし、墳丘遺存面における測量の成果(図5)では墳頂を中心に同心円状の等高線が確認できる。この結果は、昭和46年に行われた第1次調査の測量結果との整合性がみられるものであり、影塚2号墳の墳形は円墳と考えられる。

### 3. 墳丘

墳頂部は標高約52.25m、墳丘裾部の高さ48.50m、比高差は約4mである。墳丘の遺存状況及び横穴式石室の構築状況を確認するために、石室の玄室中点を基準に主軸に直交するトレンチを2本、主軸上に2本の計4本、北から時計回りにA、B、C、Dとトレンチを設定し、さらに羨道の石積みの状態を確認するためにa-a'ラインで土層観察ができるようトレンチを設定する予定であった。しかし、主軸沿い奥壁側(Bトレンチ)は背後に崖を控えていることもあり、十分土層が観察できる面積を確保できないこと、封土掘削により石室が崩壊する危険性があったため、主軸から55°東に軸を設けた。また、北側のA・主軸上のDトレンチに関しても同様の理由により、ある程度掘削は出来たが、観察に十分な面積及び深度を確保することができなかった。したがって、設定した5か所の内、最終的に土層観察ができたのはB・Cトレンチとa-a'ラインの3か所である。なお、石室中点および羨道の石積み確認のため設定したa-a'ラインは第1次調査の際に使用したものと復元し使用している(a-a'は1次調査でのF-Eと対応する)。

#### (1) 地山整形

設定したトレンチの断面および、墳丘遺存面上で馬蹄形状周溝等の明確な地山の整形痕跡は確認できなかつた。南北の墳丘の削平の際、破壊された可能性が高い。

#### (2) 盛土

##### Cトレンチ断面(図6)

墳丘南側、石室の主軸に直交するように設置したトレンチの土層で、横穴式石室の墓坑や裏込めを確認した。標高49m付近で地山を平坦に仕上げ、墓坑を掘削する。墓坑は50cm程度である。裾部が削平され確認できないため、地山整形の痕跡は確認できなかつた。墓坑掘削後、石室構築と並行して裏込め充填をおこない地山の平坦部に盛土をもつてある。盛土部分では、標高50m付近を境にして大きく二分できる。下方(1工程)は薄く緻密に盛土を行っているのに対し、上方(2工程)では大きめの土のブロックを積見上げながら盛土を行っている。1工程では墓坑内部と、その上部の小2工程に分割が可能である。また2工程は、土色の違いからさらに3つの小工程に区分できよう。それぞれ1-1工程のように呼称する。1-2・2-1・2-2工程では盛土中にはいくつか土手状の高まりが見られ、土手状の高まりと石室石材との空間を埋めるように盛土をし、土の流出を抑えながら墳丘を盛り高めていったものと考えられる。最後の2-3の工程では、ブロック状の土を下方から積み上げ仕上げとしている。

##### Bトレンチ断面(図7)

墳丘の南東側、玄室中心点を通る主軸から55°東に軸を傾けた場所に設置したトレンチでは、Cトレンチ土層同様に横穴式石室の墓坑や裏込めを確認した。標高49m付近で地山を平坦に仕上げているが、墳裾は地山を一部削り込みすぎたのか、あるいは地形上の制約があったのか不明であるが、地山と類似した土(土層7.3)を充填し平坦面としている。平坦面作出後は墓坑を掘削し、Cトレンチ同様に薄く緻密な土を丁寧に盛ることによって石室側壁を支える。盛土は、標高50m付近を境にして大きく二分できる。下部は薄い土を緻密に盛っているのに対し、上方はブロック状の土を積み上げていることもCトレンチと同じである。しかし、Cトレンチ土層では見られた、土手状の高まりを示すような土層は確認できなかつた。



図 6 Cトレント層断面(S=1/40)

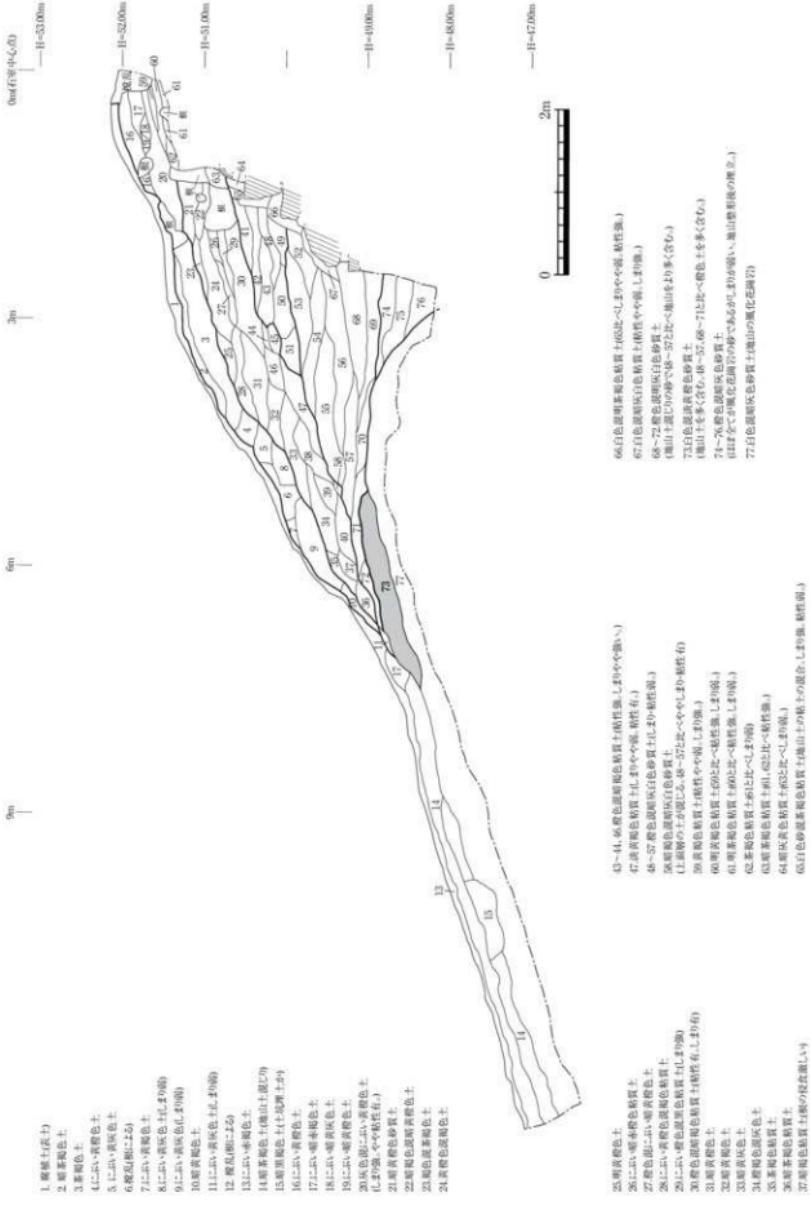


図 7 BTレンチ-土層断面(S=1/60)

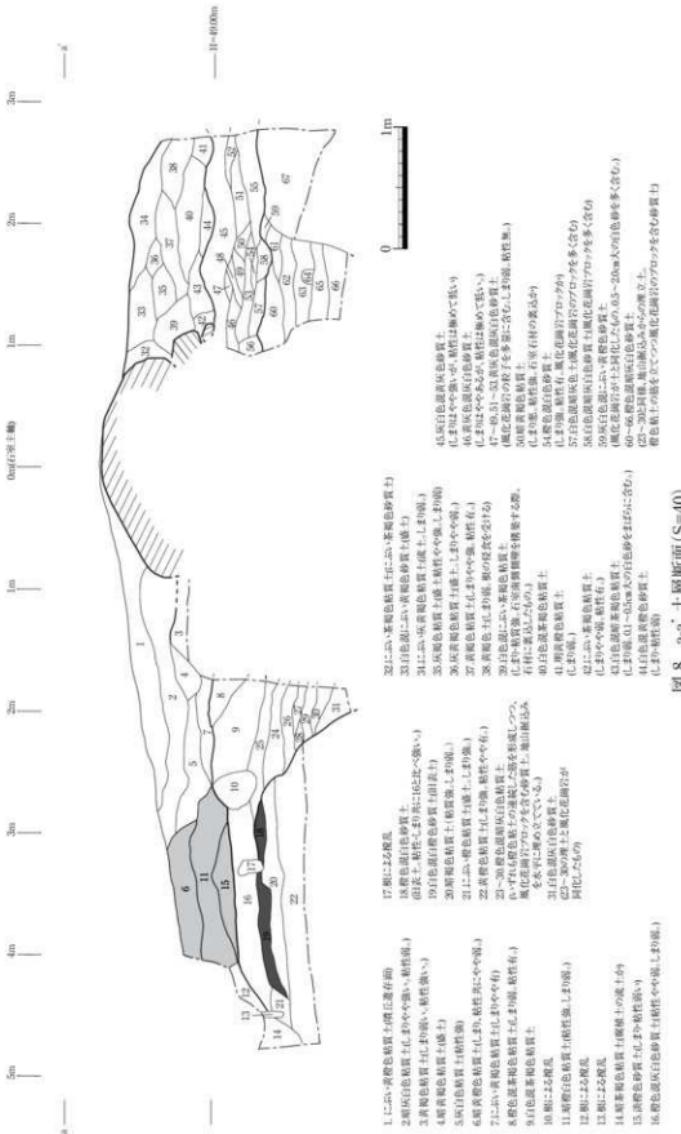


図 8 a-a' 土層断面(S=40)

a - a' ライン断面(図8)

羨道の石積みの状態を確認するために石室入口際に設定した。標高48.7m前後で旧地表面(土層18-19)が確認でき、そこから羨道掘方が確認された。70cm程度掘削されている。盛土部分では、標高49m付近を境にして大きく二分できる。下方(1工程)は薄く緻密に盛土を行っているのに対し、上方(2工程)では大きめの土のブロックを積みあげながら盛土を行っている。盛土の下方はB・Cトレーニ同様に小2工程に分けられるが、盛土上方は1工程のみしか確認できない。天井石材が露出していることから考えても、多くの墳丘盛土が流出したものと判断される。

(3) 墳丘祭祀(図9)

石室入口側の墳丘上のI区およびIV区では完形に近い須恵器が出土した。いずれも、表土下のやや黒味を帯びた土層上からの出土である。出土した遺物数としては多くはないが、状況から何らかの墳丘祭祀が行われたものとしてここでは報告する。I区では羨道北側の墳丘上から須恵器の壺身(2)の中に壺蓋(1)の天井部が落ち込んだ形で出土した。壺蓋の天井部は壺身の内部から出土したが口縁部は周辺から出土している。これは、身に蓋がかぶさった状態であったことを意味しており、同様の出土状況は影塚1号墳の調査の際にも墳丘上から確認されている。さて、出土した1の壺蓋は、復元口径13.6cm、器高4.2cmを有する。口縁端部内面には明瞭な段は形成されないが、やや強いナデ調整が施されている。天井部と口縁部境に沈線等による明瞭な境は見られない。しかし、天井部にはつよい手持ちヘラケズリが施されているため天井部・口縁部境がくろうじてわかる。天井部に施されるヘラケズリは非常に粗く、内面および外面上のそのほかの部分は丁寧なナデ調整が施されている。色調は外表面が茶褐色、内面は淡黄褐色を呈しているが、焼成は良好である。胎土は緻密で非常に丁寧なつくりをしている。2の壺身もほぼ完形で、口径15.0cm、器

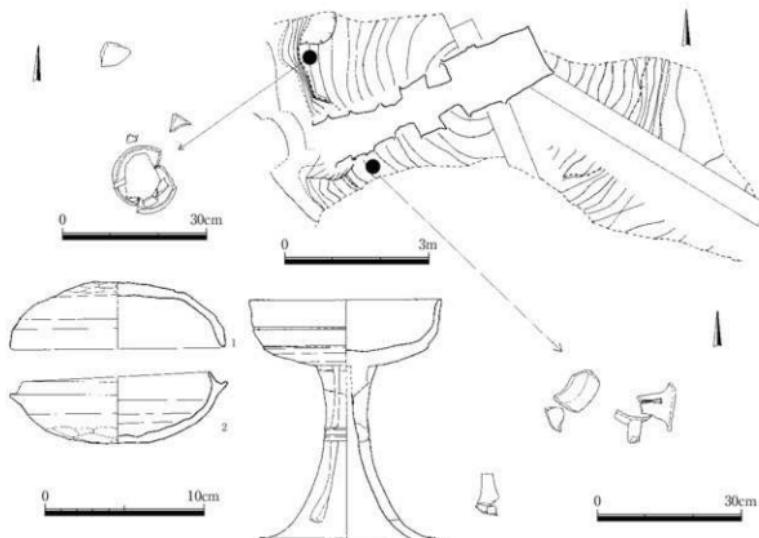


図9 墳丘土器出土状況(S=1/3, S=1/10, S=1/100)

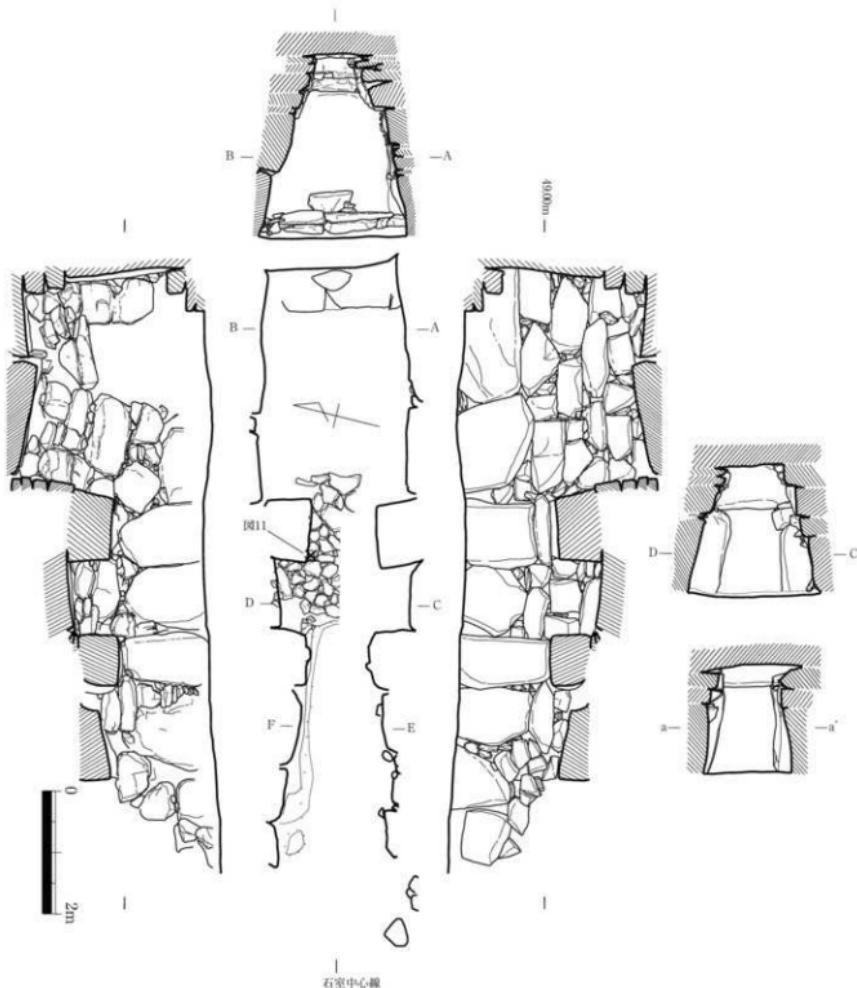


図10 影塚2号墳石室実測図(S=1/80)

高4cmを図る。ややひずみがみられる。胴部は丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部は短い受け部から直線的に内傾する立ち上がりを有している。立ち上がりの高さは8mm程度である。外面調整は、底部付近には丁寧なヘラケズリが施される。ケズリの単位は2~3cmで手持ちのヘラケズリであろう。また体部から受け部、立ち上がりから内面にかけて丁寧なナデ調整である。外面色調は橙褐色、内面は淡黄褐色である。胎土は非常に緻密で、焼成は良好である。

また、IV区では漢道南側の墳丘から土師質に近い高坏が破片の状態ではあるがまとまった形で出土している。影塚1号墳でも漢道南側の墳丘上で高坏の出土が確認されている。1号墳の場合は、高坏は土師器である上に2点みつかっており、うち1点は立った状態でそのほかは破片の状態で出土している。2号墳

の場合は近辺に樹木があり、その根の影響で破壊および上下の移動が生じており、原位置を保っているとは言い難い。しかし、破片を接合すると3のようなほぼ完形の無蓋長脚高坏となる。もちろん、羨道南側であること・ほぼ同地点で出土していること・土師質に近い色調を呈していることといった類似点のみで祭祀と結びつけることは難しいが、ここでは積極的に評価し墳丘祭祀の一部とみなしたい。さて、3の無蓋長脚高坏は、口縁部は1/2の残存率で、復元口径は12.2cm、器高は15.6cm、坏部高は4cm、底径は15.6cmである。大きく広がる底部から直立気味に細い脚部をもつ。坏部は平底に近い形状から直立気味の口縁部へ続き、小さく外反する口縁端部へと達する。胴部には2条の沈線がめぐり脚部を2段に分けている。それぞれには長方形の透かしがあり貫通する。色調は内外ともに淡黄褐色であるが焼成は良好である。墳丘から出土した須恵器は小田編年のⅢB期に属するものと考えられる。

#### 4. 埋葬施設

主体部は主軸を等高線に直交させ、主軸方位をW-28°-Sにとり、西南西方向に開口する複室両袖型の横穴式石室である。昭和46年調査時では、石室左壁の測量および石室内発掘調査まで実施することができていない。したがって本来ならば、今回はこれらの調査をおこなう必要があった。しかし先述した通り、玄室内左壁の側壁石材が抜け落ち、天井石に近い部分の石材が内側にせり出している危険な状態であったため、玄室内での発掘作業は行わず簡易測量を、前室および羨道は北側半分のみ掘削をおこない、敷石等の把握をおこなった。

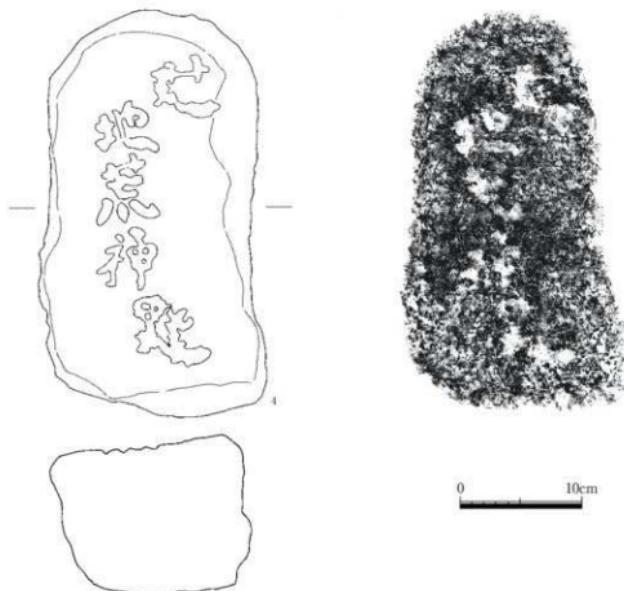


図11 石室内出土遺物(S=1/4)

### (1) 玄室

奥幅210cm、左幅370cm、右幅400cm、前幅230cmを測り平面プランは長方形である。奥壁は巨石を一枚据える。右壁の腰石は2石から成り、その上は4石が重ね水平積んでいる。左壁は腰石の状況は崩壊しているため不明であるが、右壁の腰石1石分の高さが左壁の2石分の高さに等しい。したがって、右壁は腰石から上は4石で天井石まで積み上げていたが、左壁は腰石から上は5石積み上げられている。崩壊で詳細は不明であるが、おそらく両壁共に目地が通っていたと考えられる。両壁ともにやや内傾して持ち送りながら天井へ達し、天井石は1枚で、最も高いところで270cmを測る。奥壁には「妙法□ 千住姫觀音菩薩守□」と書かれ、祭壇が設けられていた。「千住姫觀音菩薩」という文字の両側には「鬼將軍」という文字や「中村命□□□」や「安部家為先祖累代□□」といった個人の名前と思われるものも見られる。字体からすると近世以降に書かれたもので、道教等の宗教を彷彿させる記述でもないことから、民間信仰の一つと考えられる。玄室内にはプラスチック製の椀やロウソク立も散乱していたことから、近年まで信仰の対象として地元で利用されていたと考えられる。

### (2) 前室

奥幅210cmを測る。左壁は若干主軸に寄ってはいるが、両壁共に直線の長さ120cmを測る平面は長方形プランである。腰石は1石からなり、右壁は玄室腰石の高さと等しく、左壁は腰石+1石分と高さが等しい。右壁はその上に扁平な石と方形の石材を積んでおり目地が通っているが、左壁の目地は通っていない。また、玄室と前室境の仕切りとなる天井部には、まぐさ石があり前室が一段高くなる構造をしている。この構造は筑後地域でよく見られる。床面には仕切り石は見られず、20cm大の平坦な石材が全面に敷かれている。ところどころ石材が抜かれた痕跡や石が片寄せされている場所もみうけられた。床面からは古墳時代遺物は出土せず、「□地荒神□」と彫り込まれた石材一点のみが出土している。この石材もおそらく玄室奥壁の文字と同様に、民間信仰を物語る遺物であると考えられ、玄室同様大きく改変がなされているものと考えられる。

### (3) 漢道部・閉塞施設

道部は主軸を中心に左壁は300cm、右壁は270cmではほぼ均等にバチ型に開きながら前庭部へと達する。床面の敷石は全てはぎ取られて残存していない。また、閉塞施設も後世の石室利用によって大きく改変さ

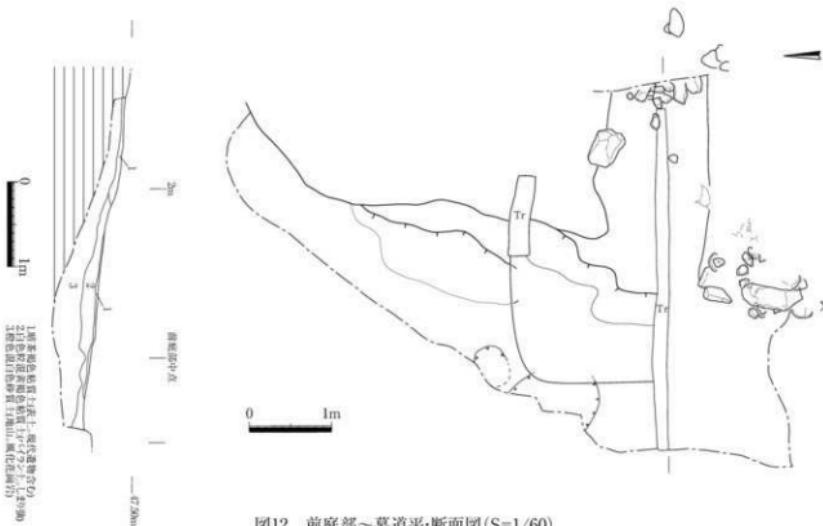


図12 前庭部～墓道平・断面図(S=1/60)

れており、閉塞石等も遺存していない。

#### (4) 前庭部・墓道

前庭部では、主軸に沿ってトレンチを設定し、墓道の有無を把握した。その結果、表土直下で地山を検出した。面的に表土を除去し墓道等の遺構の有無を確認したが、検出はされなかった。前庭部では数段の造成が見られる。地山直上では現代のガラスやプラスチック等が出土し、後世の石室利用の際に古墳そのものを大きく改変した際に破壊をうけたものと思われる。

### 5. 出土遺物

#### 墳丘上出土遺物

5~8は須恵器の壺身である。5はIV区墳裾からの出土である。復元口径は10cm、残存高は2.6cmである。丸みのある底部から短い受け部を持ち、立ち上がりは短い。口縁端部は丸くおさめられている。内外ともに回転ナデ調整が施されているが、内面はより強く施されており、口縁部立ち上がりと胴部の境が明瞭である。色調は内外面ともに灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に約1mm程度の白色砂粒をまばらに含む。6は、I区石室入口付近の墳丘から出土した。1/5程度の残存率である。やや扁平な胴部から水平で短い受け部から内湾気味の短い立ち上がりをもつ。外面下部に一部回転ヘラケズリがみられるがそのほかは内外面ともに回転ナデ調整が施されている。色調は外面胴部が灰褐色、内面および外面は受け部から立ち上がりまでが赤褐色を呈する。焼成は良好で、胎土は緻密である。7はI区の墳丘上の表土直下から出土した。1/5程度の残存率で復元口径は13.0cm、残存高は2.7cmである。扁平な胴部から短く水平な受け部、やや長いが強く内傾する立ち上がりを有する。胴部下位に回転ヘラケズリが確認できる以外は内外面ともに回転ナデ調整である。底部付近に線刻の痕跡がみられヘラ記号と考えられる。8はI区表土直下で出土した。墳丘斜面上や裾部等に破片が散逸しており本来は墳丘上にあったものが転落したものと考えられる。復元口径は11.2cm、器高4.4cmである。丸みのある胴部と短く水平な受け部、内傾する短い立ち上がりを有している。調整は外面の胴部3/4は回転ヘラケズリでそれ以外は回転ナデ調整である。外面底部には直線的に沈線が走っておりヘラ記号と考えられる。色調は外面がにぶい黄褐色、内面は灰褐色である。焼成は良好で、胎土は緻密である。

9は須恵器の壺の口縁部片である。石室前庭部表土中から出土した。前庭部は後世の土地改変の影響を強く受けていることは前述した通りで、墳丘から転落したものと考えるのが自然である。口縁部の残存率は1/6程度で非常に小片である。復元口径は8.8cmである。緩やかに内湾する頸部から小さく直立する口縁部をもつ。口-頸部境は沈線があり境が明確になる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。焼成は良好で、胎土は約1mm以下の白色砂粒をまばらに含む。

10は、須恵器壺の口縁部の破片と考えられる。III-2区の墳裾部の表土直下で出土した。小片のため法量は不明。おそらく緩やかに内湾しながら広がる口縁部で、口縁端部は面取りされ、やや下垂する。口縁部内外面ともに回転ナデ調整が施され、焼成は良好。内外面ともに灰色を呈し、胎土は緻密である。

11は大甕の胴部の破片である。胴部上半と考えられるが傾きには不安が残る。III-2区の墳裾から出土している。もとは墳丘上にあったものと考えられる。外面は格子目状のタタキ、内面にはそのあと具痕跡が同心円状に残る。

12・13は土師器である。12は土師器の甕で、I区墳丘内、a-a'ラインよりも西の墳裾に近い部分の墳丘盛土内から出土した。復元口径は15.0cmである。弱く直線的に内傾する肩部から直立気味に外傾口縁部をもつ。外面調整は胴部が粗い縦方向のハケメ調整で口縁部に施されるヨコナデ調整によって一部が消えている。厚みは1cm以上と厚い。内面は胴部に強いケズリが施され、口縁部には横方向のハケメ調整がみられる。色調は内・外面ともに橙色で、焼成は良好である。13は甕・あるいは壺で、Bトレンチ内の

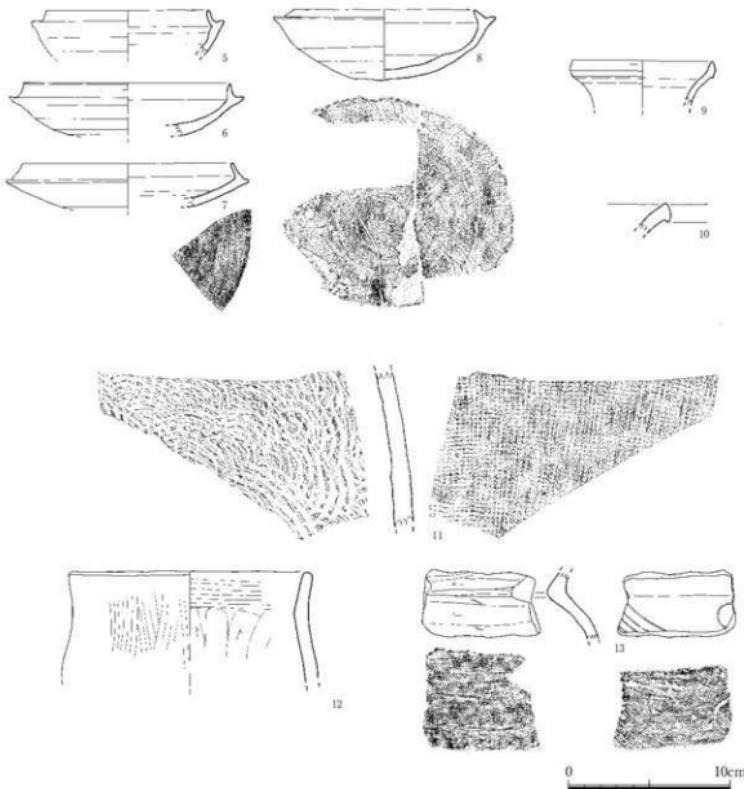


図13 墳丘出土遺物実測図(S=1/3)

出土である。頸部の破片で、丸みを帯びた肩部の外面には一部、連弧状および円形の文様が沈線によって施されているが、新しい傷の可能性もある。外面調整は丁寧なヨコナデ調整で、内面は肩部は横方向のヘラケズリ、口頸部片はハケ調整である。焼成は良好で、胎土は0.5～2.0mm大の白色砂粒・金ウンモ片をまばらに含んでいる。外面は橙褐色、内面は黒褐色を呈する。一部煤のようなものもみられるが詳細は不明である。

#### IV. まとめ

影塚古墳群2号墳の調査では、限定期間ではあったが古墳の築造方法や石室の構造等を把握することができ、影塚1号墳と開口方向や墳丘の構築方法、出土遺物など多くの点で共通点が見られることが確認された。墓道周辺は大きく削平されていたため、追葬の有無・回数共に不明である。そのため、いつ頃まで使用されたかは判断つかないが、築造時期については、出土遺物から見ると、小田編年のⅢB期の須恵器が最も古い遺物であること、また石室構造からも、6世紀後半ごろの築造と推定される。



Ph 1. 現況(東から)



Ph 2. 現況(北から)



Ph 3. 現況（西から）



Ph 4. 現況（南から）



Ph 5. Bトレーンチ土層断面



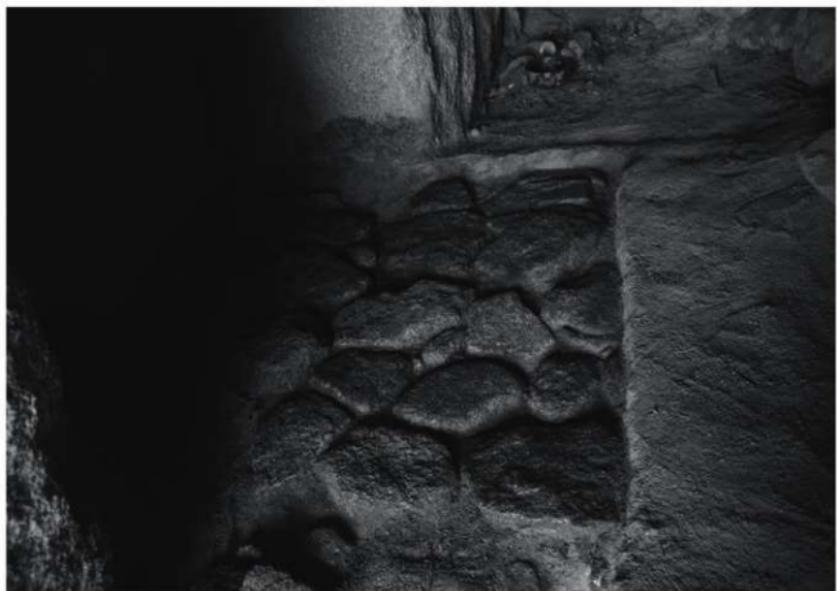
Ph 6. Cトレーンチ土層断面



Ph 7. a - a' 西側土層断面 (北から)



Ph 8. a - a' 東側土層断面 (北から)



Ph 9. 前室敷石検出状況（石室入口から）



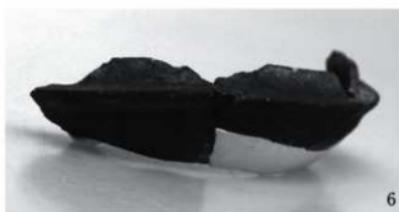
Ph 10. 奥壁



Ph 11. I区墳丘上遺物出土状況（西から）



Ph 10. IV区墳丘上遺物出土状況（南から）



Ph 13. 墳丘・石室内出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	かげつかこふんぐんに						
書名	影塚古墳群2						
副書名	第2次調査－影塚古墳群2号墳の報告－						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1279集						
編著者名	大森真衣子・服部瑞輝						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8620 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2016年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
かげつかこふんぐん 影塚古墳群 第二次	ふくおかし・さわらく 福岡市早良区 おおたのまち 大字野芥5丁目	40130	0276	33° 32' 13"	130° 21' 9"	20150202 20150319	190m <sup>2</sup> 記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
影塚古墳群 第二次	集落	古墳時代	古墳	須恵器・土師器			
概要	<p>影塚古墳群は、油山西山麓に位置している。影塚2号墳は、南北が後世の造成の影響で急峻な崖になっており、かつ、玄室左側壁が抜け落ち石室崩壊の危険性があったため、墳丘部・前庭部の調査を中心に行い、石室内部は閉塞施設と前室の一部の調査を行った。</p> <p>調査の結果、南西方向に開口する横穴式石室を埋葬施設とする直径15mの円墳であることが確認できた。墳丘部では、石室入口付近で須恵器の杯・杯蓋がセットで出土しており、何らかの祭祀が行われていたと考えられる。また、石室は一石をひと単位として幾つかの工程に分けて構築されており、石室付近は丁寧な版築状の積土が認められる。一方、前庭部は後世の造成を受け、墓道等もすでに破壊されていた。</p> <p>石室は復室構造の両袖式の横穴式石室であるが、羨道部分の敷石は剥ぎ取られ、閉塞施設も完全に破壊されていた。前室は、敷石がかろうじて残存していたが、原位置を保っていない可能性が高い。</p>						

## かげつか 影塚古墳群2

第2次調査－影塚古墳群2号墳の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書1279集

2016(平成28)年3月25日発行

発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1丁目8番1号  
 (092)711-4667  
 白川 株式会社I・P  
 (092)623-2812